26. 東京帝国大学機械工学科卒業記念写真アルバムについて

機械系図書室　　滝沢正順
takizawa@mech.t.u-tokyo.ac.jp

1.

東京大学機械系図書室には、明治時代と大正時代の東京帝国大学工科大学機械工学科卒業生の卒業記念写真のアルバムが数冊ある。これに関して述べてみたい。

図書館資料の未整理にはいろいろなケースがあり、最近購入し、近日中に閲覧に供することができるという場合もあるが、資料整理に必要な人員が不足なため未整理状態が続く場合、また、資料の性質上、整理や目録作成に書誌学等の専門知識や調査が必要ですぐ手がつけられない場合もある。

この卒業記念アルバムも未整理資料だったのであるが、未整理の理由は、一群の（数群の？）未整理資料の中にあったためである。その一群の（数群の？）資料は、どれも東京（帝国）大学機械工学科に関係するもので、おそらく複数の時期に複数の経緯で機械系図書室に移され、所蔵もしくは保管されてきたものと判断される。ただ、どれも、大学外にあったものではなく、もとから東京（帝国）大学機械工学科（機械系三学科）内にあったものと判断される。

これらの資料が未整理であったのは、どれも歴史的な研究資料に属するためである。機械系図書室の利用者のなかでは史的研究の利用者の数よりも、先端分野の利用者の数のほうが圧倒的に多いため、史的資料の整理の業務上の優先順が先にはならなかった。そして、整理に必要な人員数や業務上の余裕が不足していたためである。

ただし、これらの資料は、史的分野の研究者に非公開だったわけではない。レファレンス業務上の問い合わせ等があって、これらの資料内にさがす資料がみつかる可能性がある場合には、図書室側でさがしてみたり、研究者じしんに資料群をしらべてもらったりしてきた。図書室側でとくに知らせたわけではないが、他の史的資料の調査で来室した研究者が、これらの資料の一部をすこし調べてみて、興味をしめすこともある。もっとも、当面の調査目的のほうが優先になるのであるが。

2.

ところで、これらの資料のなかには、過去の、つまり、明治・大正・昭和前半の教官の

私物だったと推定される本やアルバム等がふくまれている。それらは、たんに「保管」していることになるだけなのだろうか、それとも「所蔵」資料といってよいのだろうか。

図書館資料とは別のものでこの点についてみてみよう。現在、東京大学の構内や建物内には、多くの肖像彫刻がある。かつて 1998 年に東京大学総合研究博物館で開催された展覧会「博士の肖像」は、それらの東京大学内の肖像彫刻や肖像画の一部を展示したもので、図録は東京大学出版会から発売された。

図録中の解説文によると、この展覧会の準備のため東大内の肖像彫刻等を調査中、それらが「誰が所有し誰が管理しているかが曖昧」であり、「いずれも国有財産として登録されているわけではない。だからといって私物でもない。」「「ずっと昔からここにあるもの」という説明を、調査の現場ではしばしば耳にした。その多くは教室や学科で大切に受け継がれてきた伝来品」であったという。（木下直之「肖像のある風景」、木下直之編『博士の肖像：人はなぜ肖像を残すのか』東京大学総合研究博物館発行、東京大学出版会発売、1998 年、37 頁。）

東京大学機械系図書室の上記の資料も、扱いとしては同じかたちで、「結果として事実としての寄託」「結果として事実としての寄贈」であると考えられる。もっとも、なかには、純然たる個人の日記帳かと推測される資料もあって、これについては寄託したという文書等がなければ私物の保管であるのかもしれない。ただ誰の日記であるのかは、もしくは本当に日記なのかどうかは、まだ未確認である（字が判読しにくいため）。「事実としての寄託」といえない場合は利用者への閲覧可能な資料とはできないわけである。

ところで肖像彫刻等の場合であっても、ずっと伝来され続けられるものであるとは限らない。上記の展覧会や図録ではふれられなかった肖像彫刻であるが、東大工学部関係の人物の肖像彫刻で、東大構内に伝来され続けなかった例をひとつあげてみたい。

明治 30 年に東京帝国大学電気工学科を卒業した市川紀元二の銅像がその例である。市川工学士については、横山英著『市川紀元二中尉伝』（真人社、昭和 16 年 3 月発行）という本があって、以下おもにそれによるが、明治 6 年生まれで、大学卒業後は電灯会社や電鉄会社の技師として勤務、日露戦争で小隊長として首山堡付近の戦闘での活躍で有名になり、その後、奉天会戦で 33 歳で戦死した。

市川工学士の記念碑が昭和 10 年に中国東北部に建てられたほか、日露戦争後、郷里の静岡県、そして明治 41 年 11 月 11 日除幕式で東京帝大構内にも銅像が建てられたという。

東京帝大構内の銅像は、「運動場の南側の立木の中に、軍刀を振つて突撃する姿勢で現在も立つてゐる」と『市川紀元二中尉伝』4 頁に書かれ、巻頭に写真も掲載されている。しかし、現在そうした銅像は東大構内にないので、どうなったのかと思っていた。銅像の作者は高名な美術家なので（新海竹太郎・作）、第二次世界大戦後に時代思潮と合致しないという理由だけで廃棄されたとも思えなかった。どうなったかというと、第二次世界大戦後に、東大構内から静岡市の護国神社の境内に移築され、現存しているようである。なお、軍装の銅像が東大構内に建てられた例はほかになかったようである。

市川紀元二関連のことをすこし付記しておくと、子供は一人いたが、早稲田大学在学中に二十歳で夭逝、市川工学士の夫人は子供の死後も養子をとらず家を自分一代にするつもり、と『市川紀元二中尉伝』のなかにある。

首山堡付近の戦闘のときの市川工学士の上官の中隊長は、松井石根（いわね）である。松井大将は、第二次世界大戦後の東京裁判（極東国際軍事裁判）のA級戦犯25人のひとりであり、もと総理大臣の東条英機大将らとともに死刑になったが、出版された昭和10年の座談会のなかで市川工学士のことを詳しく紹介・賞揚しているという。敗戦前の出版物で松井将軍について書かれたものには、市川工学士のことが出てくるものがいくつかあるようである。

また市川紀元二は養子で、生家は青山家であるが、市川紀元二の実弟のひとりは青山士（あきら）である。青山士は東京帝大土木工学科を卒業、パナマ運河建設工事への参加や荒川放水路建設工事・信濃川大河津分水路工事で知られる。（日本）土木学会会長もつとめた。

以上少々ながくなったが、伝来がずっと続くとは限らないという例を記した。図書館資料の場合でも、伝来（所蔵・保管）がずっと続くとは限らない場合があると思われる。

3.

さて、東京帝国大学機械工学科卒業生の卒業記念写真のアルバムについてである。

卒業生各自（と教官）が卒業記念として持つため作られたと思われるアルバムで、確認した範囲では、現在10冊ある。同じ年度のもの、つまり複本もあるので、年度としては7回分のアルバムがある。

卒業年月でいうと、明治38年7月（2部）、39年7月（3部）、40年7月、42年7月、44年7月、45年7月、大正10年3月、である。

「東京帝国大学工科大学機械工学教室」というスタンプが押されたものが複数あるので、これらのアルバム（の一部？）は機械工学科の保管品であったと考えられる。

形は、大正10年3月のはタテ長だが、他の年のはみなヨコ長である。

外表紙の装丁は、明治44年7月が紙で、明治45年7月が皮革、他の年のは布である。布のうち、明治38、39、40年のは背は皮革である。

アルバム収載の写真の種類はだいたい同じで、建物（辰野金吾設計の工科大学本館の外景）、工科大学前庭などの風景、実験室内や製図室内、といった写真があって、それから、機械工学科の各教官の肖像、卒業生の肖像、が掲載されている。教官と卒業学生の肖像は各人1枚であり、学科の構成員全員やその年度の卒業生全員の集合写真はない。学生は学生服、教官は背広である。

教官と学生の肖像に名前が記載されていないアルバムもあるが、名前があるものも、教官の官職等はなく人名だけである。（大正10年3月のだけは、教官に「教授」「講師」といった官職が記載されている。）

機械工学科のなかには舶用機関学専修のコースがあって、『東京帝国大学一覧』の卒業生名簿では分けて書かれているが、アルバムの肖像では、とくに区別さていない。

というよりもこれらのアルバムには文字の情報がきわめて少ないのである。

大正 10 年 3 月のだけは例外で、外表紙に「紀念」とあるほか、卒業生のなかの「卒業記念帖編纂委員」による「はしがき」があり、奥付もある。この年度の卒業生名簿も掲載されていて、出身高等学校、原籍、姓名、が姓名のイロハ順に記載されている。

ところが他のアルバムには名簿すら掲載されていない。写真だけで構成されたアルバムなので、もし教官や学生の名前がなく建物がわからなければ、何の写真アルバムかわからない。学生服姿の肖像が並んでいるから学校ということは分かるが、もし入学記念のアルバムといわれても否定ができない。

現に明治 44 年 7 月のは、名前がいっさい書かれていないので、他の卒業アルバムと一緒でなければ、何のアルバムかわからない可能性が大きい。教官の顔ぶれが他の年の卒業アルバムとほぼ一緒であることと、外表紙に「 MECH 1911 」と書かれていることで、機械工学科の 1911 年（明治 44 年）7 月の卒業アルバムであることがわかる。「 MECH 」は mechanical の最初の 4 字である。保管・管理用の「東京帝国大学工科大学機械工学教室」というスタンプも押されている。

文字情報がなくて卒業年月がわからないのは、かつて保管するときにも不便だったらしく、鉛筆書きの「明治四十四年卒業」「明治四十五年」といった後に書かれたメモが記されている。

後のメモを別にすると、明治時代のぶんで人名以外に年月についての印刷された情報があるのは、明治 45 年 7 月のもので、外表紙に「 SOUVENIR 1912 」と記されている。また明治 38 年 7 月のは 2 部とも「ロシァ征討の二年目にあたり工科大学卒業の記念。」と書かれた紙が貼付されている。

肖像に書かれた名前のうち、明治 38、39、40 年のは、肖像の当人が手書きをしたものように思われる。名前が印刷でも写真貼付でもなく、しかも筆跡が違っているのである。名前はペンでアルファベット書きされたものと、筆で漢字書きされたものがあり、肖像のなかにはアルファベットと漢字と両方書かれたものもある。また、たとえば明治 38 年 7 月のは 2 部あるうち、学生の名前については、1 部は筆で漢字、もう 1 部はペンでアルファベットである。したがって、2 部あるが、書誌としては（書誌についての考え方にもよるが）別と考えることもできる。

なお、卒業生の名前で卒業年月を確認するには、『東大機械同窓会名簿』の氏名索引で卒業年をみて、『東京帝国大学一覧』（従大正六年至大正七年）の「学士及卒業生姓名」で卒業年月を確認した。